

# はだか麦の晩播き対策

農林水産研究所

## 1 晩播きによる栽培上の問題点

適期(11月中下旬)より晩播きすると、出芽期が低温となるため、①出芽数と茎数が不足しやすい。また生育期間が短く、②穂数や全粒数が減少し、低収となりやすい。

さらに、③遅れ穂が発生し穂揃いがバラつき細麦が増えるなど、品質が低下しやすい。

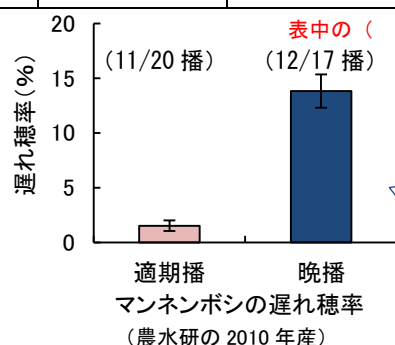
表1 マンネンボシの播種期別の生育と気象条件(農水研の2010~2013年産の平均)。

播種区分	播種日	出穂期	成熟期	生育日数(日)	
				播種~出穂期	登熟期
適期播き	11/16	4/2	5/22	137	50
晩播き	12/19 (Δ33)	4/15 (Δ13)	6/3 (Δ12)	118 (Δ12)	49 (Δ1)



分けつ期の姿(撮影日:2013年1月8日)

晩播きは分けつ発生が遅い。



晩播きは出芽数や茎数が少ないため遅れ穂が発生しやすい。

## 2 晩播き対策のポイント

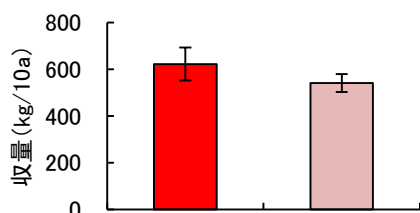
### 1) 出芽数の確保

播種量を増量し、単位面積あたりの苗立数を増やす。さらに排水対策をしっかりと行い過湿な土壌条件での播種は避け、深播きにならないように播種深度に注意する。

	11/25 まで	12/10 まで	12/20 まで	12/下旬以降	目標苗立数
播種量 (kg/10a) (条間20~30cm、深さ3cm)	8	8.8~9.6 (1~2割増)	10.4~11.2 (3~4割増)	12 (5割増)	150本/m <sup>2</sup>

### 2) 施肥

12月播種は出芽までに1か月程度かかるため、播種時の基肥を減らし、出芽後(1月)に追肥する後期重点施肥を行う。さらに穂数を確保するため、中間追肥(2月)は省略せず必ず施用し分けつを促進する。追肥は土壌pH維持のため、NK化成を施用し、分けつが少ない場合の過剰な穂肥は、遅れ穂が多発するので厳禁。晩播の収量は適期播きの8~7割となる。



晩播きしたマンネンボシの窒素施用法別の収量。(農水研の2017年産 坪刈データ)

#### <窒素施用法の内訳>

	窒素施用量 (kg/10a)				計
	基肥	追肥1 (1月)	追肥2 (2月)	穂肥 (3月)	
後期重点施肥	4	3	3	3	13
慣行施肥	7	0	2	3	12

### 3) 雑草害と湿害対策

分けつ数が少ないと春草が繁茂しやすいため、雑草害には十分に注意を払う。また春先は雨が多くなってくるので、表面排水溝の再整備を行い、湿害対策に万全を期す。